中世考古学文献研究会会報

第4号

2005. 1. 11

集散地を検討する視点－文献史学と中・近世考古学の融合のために－（報告要旨）

矢田俊文（新潟大学人文学部）

1．中世考古学・文献史学（日本中世史）それぞれの研究の特徴

考古学と文献史学とでは依拠する資料が異なることからくる研究の特徴がある。考古学・文献史学それぞれの研究の特徴を理解することなしに学融合は進まない。

文献資料は首都京都の資料が圧倒的に多いため研究の偏りが起こってくる。また、文献史学研究者が研究対象にする文書・日記は権力者の情報が圧倒的であり、日常品の研究が弱い。

文献史学では、武家文書・寺院文書の研究は進んでいるが商家文書の研究はない。それは、商家は盛衰がはげしく、家として長く存続しないため文書が伝来しにくいことに原因があると思われる。史料がなければ研究は進まない。

中世考古学の研究をみると、生産地・消費地の研究は強いが、集散地の研究はあまり強くないように思う。考古学においても、モノを流通させる中心人物が流通業者であるという認識を確立させればあらたな研究が生れてくるのではなかろうか。

2．集散地遺跡研究の成果

中世考古学でも集散地の研究は始まっている。安濃津遺跡群（三重県津市、伊藤裕偉 1997・2001）・博多遺跡群（福岡県福岡市、大庭康時 2001）・元島遺跡（静岡県福田町、加藤理文 1999）などはその例である。これらの研究の共通点は、製品の未使用・破損状態によって物資流通の集散地を理解しようとしている点である。さまざまな遺構・遺物論によって、中世考古学で集散地の研究が進展することを期待する。

3．集散地研究のむずかしさ

さきほど、考古学においても、モノを流通させる中心人物が流通業者であるという認識を確立させればあらたな研究が生れてくるのではないかと述べたが、認識があらたになればあらたな研究がただちに生まれるわけではない。集散地でのモノ研究は生産地・消費地とは違う独特の困難性がある。

商品は移動するものである。本日報告される松本城下の砥石問屋遺跡（竹内靖長 1999）の砥石も、火災で被熱していなければ問屋の敷地内に廃棄されず、商品として出荷され、遺跡内で発掘されることはなかった。本来、商品は集散地にはとどまらないモノである。モノという資料から集散地を明らかにする困難性は、商品というモノの特徴にある。そのような特徴をもった地点として集散地を理解しなければ、モノから集散地を明らかにすることはできない。

4．近世集散地遺跡を議論する意義

以上述べてきたように、集散地研究はそれほど容易なものではない。しかし、物資流通研究は集散

地の研究なしには成り立たない。そこで、どのように考えても間違いなく集散地である遺跡の遺物・遺構のあり方を明確にすることは極めて重要なことである。文献からみても、遺物・遺跡からみても、間違いなく集散地遺跡である遺跡の検討は重要である。時代を越えて信州松本城下の砥石問屋遺跡などの近世集散地遺跡を理解することは、中世集散地研究にとって必要なことである。

[参考文献]
伊藤裕偉『安濃津』三重県埋蔵文化財センター、1997年
伊藤裕偉「中世における集散地遺跡の分析」『月刊考古学ジャーナル』478、2001年
大庭康時「北部九州と宋人」『西日本文化』368、西日本文化協会、2001年
加藤理文『元島遺跡1（遺物・考察編1－中世－）静岡県埋蔵文化財調査研究所、1999年
竹内靖長「松本城下における砥石流通の一事例－松本城下町跡本町第4次発掘調査から－」『松本市史研究』9、1999年
矢田俊文「中世の物資流通研究と瀬戸内地域」『公開シンポジウム「中世瀬戸内の流通と交流」資料集』中央大学文学部日本史研究室、2004年
矢田俊文「文献史学における学融合の可能性」前川要編『中世総合資料学の可能性』新人物往来社、2004年

城下町松本の上州砥石問屋遺跡について（報告要旨）

竹内靖長（長野県松本市教育委員会）

1　松本城下町跡の概要

近世の松本城下町は、信濃国の商業活動の中心地であった。天保14（1843）年に著された『善光寺道名所図会』には、松本城下の賑わっていた様子が次のように書かれている。

「…城下の町広く大通り十三街、町数およそ四十八丁、商家軒を並べ当国第一の都会にて、信府と称す、相伝ふ牛馬の荷物一日に千駄附入りて、また千駄附送るとぞ、実に繁昌の地なり…」

平成9年、松本市教育委員会が市街地区画整理事業に伴って実施した松本城下町跡本町第4次調査では、4,859点もの未使用の上州産砥石が出土した。発掘調査の結果と文献史料の検討から、当時の砥石問屋跡と推定することができた。以下、集散地遺跡の様相を考える調査事例の一つとして報告する。

2　発掘調査の概要

発掘調査地は、松本城下町の中心的な町である本町に位置している。本町は、松本城下町を通過する北国往還西街道（通称：善光寺街道）沿いにあり、問屋が集まる商業活動の中心地であった。調査では、松本城下町が作られた16世紀後半から現代にいたる人為的な整地土層を9層確認した。このうち問屋跡は、近世整地層である第1検出面において発見された。検出された遺構は、建物跡10、水道遺構2条（竹管・木樋・集水枡）、埋設桶5基、溝状遺構3、土坑41である。出土遺物は、陶磁器（瀬戸・美濃系、肥前系、京・信楽系など）、金属製品（煙管、銭貨、簪など）、木製品（下駄、曲物、漆椀、箸、荷札木簡、人形代など）、石製品（砥石、石臼）である。この検出面は火災の痕跡が明確で、広範囲に被熱面が認められ、検出面直上には焼土・炭化物層が確認できた。さらに火災による被熱痕が著しい水道遺構の溜桶蓋裏面には、「文化二乙丑年六月吉辰･･･」という墨書が認められることと、出土した陶磁器の主体時期は18世紀後半～19世紀初頭であることから、文献に記録が残る文化5年